



第8回はちきん会は、6月23日、29回生泉谷良彦氏をナイトに、氏の石油関係者の集り「薔薇の木会」と合同で、「薔薇とハチの会」として丸の内三菱クラブにて、にぎやかに開催されました。(今回も28回生から70回生ま

での「土佐」の女性達は輝いていました。)

足立さゆり(39回生) 33回生のS先輩よりお誘いのお電話をいただき、初めて「ハチキン会」に参加しました。熱気のコもる会場の中、

土佐高校卒業の女性たちが、先

はちきん会

輩の方から新卒の方まで、色々な分野で活躍されているのを見ることができ、頼もしく感じました。卒業以来高知を訪れる機会のひとつだ



い私にとつて、とても懐かしい一時でした。

上野 典子(51回生) 窓の外には皇居の森や霞ヶ関の高層ビル。都心ならではの夜景をバックに土佐弁の飛び交った今回は、一見シュール、でもいつもにも増して印象深い会でした。石油に携わる「脂」ののった紳士方のダンディズムとワインに酔いつ



つ、土佐を離れていてもますます磨きのかかった先輩方はちきんパワーに敬服。うら若きお嬢さん方からはエネルギーをたっぷりいただいて、久しぶりに、向陽の空と口ずさみながら家路を急いだ夜でした。

野崎弘子(70回生)

土佐高校を卒業して、はや6年になります。最近再認識したことは、土佐高出身者のつながりがとても強いということ。これくらいが普通だと思っていたのですが、ちょっとこんな学校はそうそうないようです。そんな学校を誇りに思っていた時、「は



ちきん会のお誘いを受け、お邪魔させていだいたところ、予想をはるかに超えて楽しい時間を過ごさせて頂きました。諸先輩方の楽しいお話しが本当にありがとうございました。

この会はいつでもご入会大歓迎です。
佐々木 (33) TEL&FAX 044-955-0562
E-mail hiro_art@muc.biglobe.ne.jp
金澤 (55) TEL&FAX 044-954-7581
E-mail apse@blue.ocn.ne.jp
西森 (57) TEL 03-3408-1454

メールボックス

詩集と、行き倒れのみみずと私と

土居泰夫（32回生）

私 去る6月20日を持ちましてそれまで働いておりまして会社の職務をお役ご免となり、引き続きチタン刃材等の販売を主たる業務とする会社で営業の仕事をして頂くことになりました。ただ、実を申しますと、甚だ横着ながらこの仕事は隠居仕事として、私には別にふたつの重大業務がございます。

そのひとつは、先頃、柄にもなく翻訳出版した詩集を早く多くの人に買って頂くことです。「ヘンリーの野生のサクランボ」なる弊翻訳詩集の原著は、数年前力ナダ観光ツアーで立ち寄った教会の売店に置かれていました。信仰心浅くクリスマスチャンでもない私ですが、拝観料のつもりで買ったのがこの本でした。なにげなくではありましたが、当時いるんなことに行き詰まり、落ち込んで荒みがちであったため、何か宗教的なものに救いを求めていたのかも知れません。帰りの機中でこの本を

読むほどに清々しい気分になり、以来座右に置いて繰り返し読み直しております内に、

いつか心は癒されていました。そのうちに、この本はもつと広く多くの人に読まれるべき本ではないかと思うようになりまして。何よりも、この美しい詩が人々の心に平安をもたらして欲しいからです。宗教的なものではありませんが心の平安を得るための幸福論とも言えるものであります。こうして翻訳出版に取り組みましたが、以来1年余り、

何度か挫けそうになる私を支え、何とかこうして出版できる運びとなりましたのは、原作者ポーラック神父の励ましと、拙訳により減殺されてもなお輝きを放つ素晴らしさを評価下さり、この翻訳詩集の出版と、その売上の一部を地雷廃絶のためのボランティア活動に寄付したいとする私の企画に賛同して下さいた多くの方々のご支援の賜物であります。いまひとつは、細々と続けております「行き倒れのみみずを救う会」の活動であります。

す。次第に失われてゆく自然の中で、草や木を支える働きをしているのみみずが、石畳とセメントで覆い尽くされた道路の上で地面を探しあぐね、やがて日の光に体表の水分を奪われ、行き倒れになろうとしている姿ほど哀れなものはありません。まだ元気なのはそつと地面の上に置いてやるだけですが、乾いた土ほこりを被って息も絶え絶えといったダメージの大きいものは、水で洗い、地面に溝を掘って水を補給し、その中に横たえ、落ち葉などを被せてその上からまた水を掛けるなどの手当てが必要でです。

不器用な人生を過ごしてきただけに不器用な冒険者と言っべきみみずの身の上が他人事に思えなくなりました。付き合ってみますとなかなか興味のある生き物で、そのいくつになってもツヤヤカな肌不老の素合成のヒントが秘められているように思えます。とりあえずは彼らの行動形態の解明が当面のテーマです。いずれ「みみずのみみず」といったものにまごめられればと思っております。

どうやら私のこれからの人生は、片方の手にチタンの刃物を掲げ、もつ一方の手に詩集を持ち、背中にみみずをおぶって歩いていくことになりそつです。いずれ売れ残りの詩集を枕にみみずを介護しながら自らも介護されているといつことになるかもしれませぬ。しかし、その日まで元気に面白く生きていきたいものと思っております。

「ヘンリーの野生のサクランボ」ポーラック神父の幸福指南詩」 一三一 円 ジュール・ポーラック著 土居泰夫訳 ストック刊 星雲社発売

ドキドキの総会出席 山口由紀（55回生） 私が土佐校同窓会の門を叩いたのは14年前。まだ独身だった私は、55回生の同窓生に会えるかもしれないと期待してデビューしたものでした。ところが会う人、会う人ナイスな叔父様ばかり、あらーと思っている間にずるずる同窓会の魅力に取り付かれてしまい、同級生の由里さんとY&Yなんぞと名乗る様になってしまいました。あの当時、貴重な独身時代の時間をなんと

多く同窓会に費やしたことが・・・今から思うと文句言いながらも結構楽しんでた自分が思い出されます。たまたま出席してくれた55回生の同級生に紹介して頂いてちゃっかり結婚までしてしまいました。主婦になって、9歳と6歳の子供達の母親となり、現在の生活は妻と母親業。

今年、久しぶりに総会に出席させていただきました。懐かしい顔顔・・・驚いた事に私の中の時間の経ち方と諸先輩方の時間の経ち方が違っていてとにかく皆さん若い!! 同窓会は生活感を殺してしまおうのでしょうか。独身時代の感覚を思い出しました。（これって、同窓会の魅力の一つじゃないのかしら。フムフム・・・） また、関東にいて高知出身者ばかりの中にいる心地よさ（高知にいて高知の人の中にいるのとは訳違つ）、そしてあらゆる分野でのハイソな先輩方のお話は、画一された世界で生活していた自分にとつてとても良い刺激となりました。（本当に土佐校出身の先輩方は素晴らしい知識人ばかりでとても楽しいです。）時間が許す限りまた出席できたらと思っております。

今年、久しぶりに総会に出席させていただきました。懐かしい顔顔・・・驚いた事に私の中の時間の経ち方と諸先輩方の時間の経ち方と違っていてとにかく皆さん若い!! 同窓会は生活感を殺してしまおうのでしょうか。独身時代の感覚を思い出しました。（これって、同窓会の魅力の一つじゃないのかしら。フムフム・・・） また、関東にいて高知出身者ばかりの中にいる心地よさ（高知にいて高知の人の中にいるのとは訳違つ）、そしてあらゆる分野でのハイソな先輩方のお話は、画一された世界で生活していた自分にとつてとても良い刺激となりました。（本当に土佐校出身の先輩方は素晴らしい知識人ばかりでとても楽しいです。）時間が許す限りまた出席できたらと思っております。

★出版しーター★

大原健士郎 (24 回生)

「悲しみを超えて 愛する人の死から立ち直るために」

創元社 2800 円

(監修) 新しい森田療法」

講談社 700 円

「心が強くなるクスリ・森田式健康法ノート」

三笠書房 1200 円

「精神鑑定 18 人の犯罪病理」

講談社 1600 円

竹内靖雄 (29 回生)

「家という迷信 超民営化のすすめ」

日本経済新聞社 1600 円

中城正義 (30 回生)

「さらば学校の世紀」

成甲書房 1400 円

土居泰夫 (32 回生)

「ヘンリーの野生のサクランボ」(訳詩集)

ジュール・ポラック著

星雲社 1200 円

塩田潮 (40 回生)

「欲望と嫉妬の海 日本政治・8 人の権力闘争」

学陽書房 1800 円

坂本隆 (47 回生・土佐高教諭)

「薫先生」

土佐中高同窓会出版 1200 円

坂東真砂子 (51 回生)

「愛を笑いとばす女たち Letters from Taniti」

新潮社 1200 円

「13 のエロチカ」

角川書店 1200 円

編集後記

「74 才なんて思えない」
先日、主人の知人で米国下院議員の M 女史と、昼食を御一緒した後で、思わず口に出たワシントン DC、国会議員食堂のことだ。年なんてまるで気にしないで自分の道を行く女史。話していると自分の未熟さが見えて恥ずかしい。秘書の一人が「年を言えば、98 才の上院議員もいらつしやいますよ。頭もシャープで、すばらしい方です。今度選挙で勝てば、6 年の任期中に――」

才を超えますね」と教えてくれた。比べれば私などまだまだヒヨコ。勉強しなきゃあ。(佐)

近頃渋味も増した I 先輩は、若かりし頃、大物女優 DF に井の頭公園でナンパされたらしい。芸能界からのお誘いもあったほど、溢れる魅力いっぱいではなかなかの女性キラーであったと聞く。同窓会 V I P の M 先輩は、大昔、長浜から桟橋まで巡航船で通学していた。女子学生の憧れの的で、港ではマントを翻しただけで黄色い声があがったらしい。タイムマシーンでその頃に戻

り、その時代の女子学生になってみたい。私も彼らにときめくかしら？(Y)

11 月も半ばを過ぎると奥多摩の山から順に下ってきた紅葉で武蔵野の灌木もすつかり色づいてしまった。天気の良い日は、午後の日差しに金と赤とがきらめいて、あたり一面の大気は透明で、やたら明るい。

アカシヤの金と赤とが散るぞえな かはたれの秋の光に散るぞえな 片恋の薄着のネルのわが愁い
曳船の水のほとりを行く頃に やはらかな君が吐息の散るぞえな

白秋
調布から国分寺にかけて古い大きな断崖があつて国分寺崖線と呼ばれているが、この崖線に沿って湧水が沢山ある。崖線の下を野川が流れている。野川の源流はこの湧水群である。最上流は国分寺駅北口の日立中央研究所の中らしい。

野川は、日立中研を流れ出たところは幅 1 米に満たない細い流れで三鷹のあたりで少し川幅が広がるが相変わらず小川の域を出ず、調布で多摩川に落ちるまでずっと小川であり続ける。崖線と野川と湧

水とただそれだけであるが、この地形は古くから武蔵野に住む人々に「はけ」の地形として親しまれ、多くの湧き水は人々の生活を文字通り潤してきた。

をちこちの雑木林や野つ原や古い農家の塀沿いや瀟洒な近代住宅の間を走る舗装された小道の上に、今ごろの季節は沢山の木の実が落ちて散らばっている。公孫樹の木も多

く、銀杏もそこかしこに落ちてい。木に登って枝を揺するとバラバラと落ちてくる。どんぐりも沢山落ちてい。大きなどんぐりで、楊枝を挿して独楽にしてまわしたらよ

くまわる。極めつけは柿の実で、この赤い大きな実が熟して、小道の上にはいっぱい落ちてい。自然落下と野鳥につ

いばまれて落ちたのと、可愛くないはしぐと鳥に食い散らかされて落とされたのと。

暮れやすい一日は、僅かの散策にも人の足を早めさせ、帰路を急がせる。時に西の空に赤い雲を見ては故郷の空を思い出し、客心を痛ましめる。岡々は胸に手を当て退けり

夕照は慈愛の色の金色の中也

(N)